
風花

海土龍

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

風花

【コード】

N6813D

【作者名】

海土籠

【あらすじ】

『月読み』から数ヶ月後、中学3年生の冬。直久の目の前に、突然、空から少女が振ってきた。朝霧は彼女を追えと言いつし、ゆずるは目を覚ましてくれないし。どうする？直久。

1・何でもアリな我が一族(前書き)

『月読み』(http://ncode.syosetu.com/n6763d/)の続編です。

風花

1・何でもアリな我が一族

こんなはずではなかった。

呻き声を上げながら、頭の片隅では逃げる裁断を巡らせていた。

こんなことになるのならば、あの時、あの夢の中で、あのガキの息の根を止めておくのだった。

額に血の筋が伝う。目に滲み、余計に惨めな思いがした。

なぜ、あの時！

本気で殺そうと思えばできたはずだ。

多少傷は負うかもしれない。だが、可能だった。

あの時、そうしていれば今頃、自分はこんなにも惨めな思いをしなくとも済んだはずだ。

目の前の少女は存在せず、あの時のあのガキの肉を喰らい、数百年分の自慢話のタネを作っているはずだった。

だが、どうしてこうも運命は狂ってしまったのだろう。

それもこれもあのガキのせいだ！

やりきれない悔しさに視界がぼやけた時だった。自分に敵意を剥き出しにしていた少女の顔が驚愕する。

「待て！ 逃げる気かっ！」

逃げる？

己の背後を振り返って、嗤った。まだ自分にはこれ程に力が残されていたらしい。

空に飛び上がると、もう一度少女の顔を見下ろした。

ニタニタと笑う。愕然とする少女の表情が愉快で堪らなかった。

「お前を殺さずに、消してやる」

「何?!」

「あはははははははっ」

高く笑いながら、時空の穴に飛び込んだ。

まったくもって愉快である。

直久はカラカラと音を立ててドアを引き開けると、職員室から出てきた。長い廊下に行く。

担任の天変地異を目前にしたかのような顔を思い出して、笑いが込み上げてきた。

くふっ、と息を漏らすと、背後から気味が悪いと声がかかった。

木村史宏。背の高い彼は、一見、『ひよろり』という擬音語が似合いそうな少年だ。

だが、つい数ヶ月前までバスケット部長であった彼は意外にも『脱ぐとスゴイ』のである。

いや、そんなことはともかく！

直久は木村に振り返り、ニツと歯を見せた。相手がいるのであれば、笑いを堪えなくとも不気味ではない。

「職員室に呼ばれたと聞いたから、さぞ、へこまされて出てくるかと思えば、ニマニマしながら出てくるし」

「説教を受けていたわけじゃねーもん。お前は？ 面談終わった？」

「終わった。終わった。そっちは？ 無事、カンニング疑惑は晴れた？」

「この顔を見れば分かるだろう？」

「信じらんねー」

木村は部活を引退してから、眼鏡をかけるようになった。今までも授業中だけはかけていたらしい。

眼鏡をかけると、ますます『ひよろり』という感じだ。

「いきなり成績上がったよなあ、お前。誰だって疑いたくもなるよ。」

実際、俺も疑ったし」

「ひでー。ダチじゃん！」

「ひでーのは、お前。俺と同じくらいバカだと思っていたのに。いつの間に勉強していたんだよ。てか、どういう勉強しているんだ？」

「んー」

どういうって……。

正直に言おう！

勉強なんてもん、やっちゃあーいません

！

ただ、数ヶ月前、めでたく一族同様に人外パワーをゲットした俺は、テスト用紙を目の前にし、その問題をボケくっつと眺めていると、答えが分かってしまうのだ。

数久に聞いたところ、テスト用紙には、その問題を作った先生の念が込められていて、念さえ感じ取ればそこから答えが読み取れしてしまう……ということらしい。

白紙の回答欄にうつすら『ア』とか『イ』とか、具体的な数字が初めて浮かび見えた時は、マジで、びっくらたまげた。

危うく試験監督の先生に挙手して、回答欄に答えがすでに埋まっていると告げるところだった。

いや、手を上げていたかもしれない。数久がテレパシーで説明してくれなかったら。

あんまりにも正解率が高いと、それが直久の場合、今までが今までなので不審を抱かれてしまうというわけで、適当にわざと不正解を書いて、答案を提出した。

だが、今までの直久の成績は、直久自身が思っていたよりひどかったらしい。成績が急激に上がったということで、カンニング疑惑が浮上し、たつた今、職員室にお呼ばれされてきたのだ。

数十分間の問答の結論は、直久は本当に数久と一卵性の双子だったのだ、ということに落ち着いた。

数久の成績が小学校時代からトップクラスだということは、中学

校の職員室内でも有名で、むしろ今までその双子の兄の成績がどん底だということに疑問視されていたくらいだ。

丁度、部活動を引退した時期だったことが幸いした。部活をやめて、受験勉強に集中しだしたおかげで成績が上がったのだからという話になり、カンニングの疑惑が晴れると、とたん担任の口調は穏やかなものに、そして、誉め言葉を並べるものにガラリと変わった。

その変貌ぶりが滑稽で、また愉快だった。

「……それでさ。お前、どこ受けるの？」

高校のことである。12月も半ば。のんびり屋の生徒もさすがに志望校を決めなくてはならない時期になっている。

直久はわずかに上方を見やると、口を開いた。

「ゆずるや数と同じとこ。深沢先輩やいけべー先輩の高校」

「あそこ良いよなあ。俺もそこにしようかなあ」

「頭、たりんのかよ？」

「たりねーよ」

「俺もギリギリだ」

ギリギリどころか、実力では100%無理。

だけど、力を使えば、わけない。きつと受かるに違いないのだ。

「九堂と言えば、あいつの女装……じゃなくて、あの格好にも見慣れてきたよな」

生まれ落ちてからずっと男として生きてきたゆずるは、人生15年目にして急に女として生きることを決意したらしい。

床屋ではなく美容院で髪を切るようになってから、同じ短い髪なのに、急に少女らしくなるから不思議だ。

制服も、男子の物ではなく、女子の物を着ている。

つまり、スカートを穿いているのだ！

ゆずるを男だと信じて疑わなかった同級生たちは当然驚いたし、

一時は町中が大騒ぎだった。

だが、見慣れてきたという木村の言葉は、皆の思いを代弁してい

るようだ。数ヶ月が経ち、ようやく落ち着いてきた感じがする。
「見慣れると、九堂って、可愛かったんだな。他の女子とは格違いに」

「そうだろ？ 数と同じくらいに整った顔をしているけど、数より細っこいところがギョツとしたくなるカンジだろ？」

あと、力が使えない時に、憂鬱そうにしている様子がめっちゃう可愛い。

普段、一人でも十分に強いから、直久に黙って人外イキモノの退治に行ってしまうけれど、満月が近付いてくると、直久の側にいてくれる。

守ってくれなんて意地でも言わない彼女は、何だかんだ側にいる理由を捜して、直久の手の届くところにいるのだ。

憂鬱そうな雰囲気と不本意そうな顔は初めだけ。直久が白い歯を見せて笑い、手を招くと、気まずそうに顔を顰め、照れたように俯いて、傍らに座ってくれる。

「最近、数の声がさー。ちょっと低くなったんだよ。それに比べゆるるの聲は、きれーなの。耳に心地良いんだよなあ。数の躰は、ギョツとすると骨張って固いんだけど、ゆるるは柔らかいし。なんつか、気持ちいいし、落ち着くんだよなあ」

「直久。のろける、やめろ。 てか、お前の基準は未だに弟なのかよっ」

「当然！ 俺、数ダイスキだしー」
「ブラコンめ……」

そのまま下駄箱に直行すると言った木村と別れ、直久は教室に向かった。

教室にゆずるを待たせてある。部活を引退してから、一緒に下校するようになった。

帰る家と同じなのだ。 約束などしていなくとも、自然とそういうふうになっていた。

職員室は二階。三年生の教室は四階に並ぶ。

他学年の教室が並ぶ階は生徒が行き交っていたが、部活動のない三年生が放課後の校内でうろつく理由がないので、さすがに四階は静まり返っていた。

そんな中、ゆずるの音が響いて聞こえた。誰と話しているのだろうか、と教室を覗き込んでみれば、なんてことはない、相手は数久だった。

気が付いてゆずるが振り返る。

「遅かったな」

「ごめん、待たせた」

二人は一つの机に向かい合って、何かを紙に書き込んでいる。

「何してんの？」

「試験問題を透視しているんだよ」

答えたのは、数久。あっさり言ってくれたが、その内容は聞き逃せないものがある。

「透視!？」

「受験の日が満月だったら、ゆずる、困っちゃうでしょ?」

「使えないから」

「……あ、そうか」

勉強して、実力で合格するつもりなど、サラサラないらしい。

「今のうちに試験問題を透視しておいて、答えを覚えておけば、いざという時も大丈夫でしょ?」

姉さんが高校受験した時も満月が近かったから、こうしたんだって」

でもね、と数久は淡く笑う。

「姉さんったら、こんなにたくさん覚えきれないって言って、結局貴樹さんにテレパシーで答えを教えて貰っていたらしいよ」

「どうしようもねえーな、鈴加は。……でもさ、貴樹さんって推薦合格したんだろう?」

鈴加とは同じ試験は受けてないじゃん」

「だから、超遠距離テレパシー」

「なんだよ、それ……」

て、その解答を姉さんにテレパシーで教えていたってわけ」

「ありえないだろう、それは……」

呆れるほど、何でもアリな我が一族である。

直久は帰り支度をしているゆずるを見下ろす。

ブラジャーを着けるようになって、急に胸がその存在を主張するようになったと思う。気が付くと、目線がそこらへんを漂っていて、焦る時がある。

つーか、今までノーブラだったのかと思うと、嫌な汗が出てくる。

確かに男にしか見えないくらいに小さい胸だったけど、中三になってもブラ無しつーのは、どうなのよ？

ばっちり触ってしまったことがある俺だから言うけれど、なんかの事故で触れちゃった奴がビックリするだろうに！

いやあー。と・に・か・く、ブラを付けてくれるようになって良かったあー！

着け初めの頃は、気持ち悪いとか何とか言っつて、文句タラタラだったのだ。

スカートの方もそうだ。股がスー・スー・すつと、嫌がついてた。

だけど、こちらは下にスパッツを穿くことで解決した。

スパッツはいい！ 風にパンチラされる心配がないからだ。

年から年中、長ズボンで肌を隠していたゆずるの脚は、雪のように白くて、マジで眩しい。

なんつーか、他の男どもに見せるのがもったいないってカンジで。今の季節が冬で本当によかったよなあ。ちよつともゆずるの肌が露出していると、落ち着かない気分になるから。

てか、そんなことを言ったら、来年の夏とか再来年の夏とか、どうするんだらう？

不意にゆずるが鋭い眼を向けてきた。冷ややかだが、どこか呆れているような。

「直、考え事をする時は、心を閉ざしてしろ」
「え」

「お前の心の声、まる聞こえ」

「読んだのかよっ」

「聞こえてくるんだよ。お前、オープン過ぎっ」

「うん。僕にも聞こえたよ。直ちゃん、恥ずかし過ぎっ」

「ていうか、一番ハズイのは、俺だろーが！」

もつともだと笑い、ゆずるは席を立った。帰ろうと柔らかく微笑む。頷いて、直久は目を細めた。

2・貴方、直久さんですよね？

数久と別れ、坂道を二人で歩く。

坂上に朝霧神社と九堂家があるのだ。先見神社は坂下すぐ近くで、直久はこちらの家に帰ることを未だに許されていない。

勘当されたというのではなく、単に『帰ってくる必要がない』と父親に言われてしまったのだ。そのまま婿入りしてしまえ、ということらしい。

しばらく歩くと、石階段が現れる。それを上りきると、石の鳥居が姿を現し、その下は石畳が敷かれている。

正面には無駄に立派な社が建っているのだが、二人は社の裏へと回り、神社に附属した古い家の方へと向かった。

『家』と一言で言うと、イメージは一般家庭の普通の家だろう。だが、ゆずるが受け継いだこの家は、家というより屋敷である。『日本邸』という言葉の方が相応しい。

べだーと広がった平屋で、玄関を入ると、ずっと奥まで見通すことのできる長い廊下がある。

廊下と和室とを区切るのは、襖か障子のどちらかだ。洋室はない。トイレさえも和式しかないという徹底した和の家なのだ。

直久は生前祖父が使っていたという部屋をゆずるから借りている。中庭の回廊に沿ってある部屋で、ゆずるの部屋とは庭を挟んで向かいである。

その庭を突っ切ってしまうえば7秒以内の距離だが、回廊を使うのであれば、建物沿いにぐるりと回り、更に渡り廊下を渡り、再び建物沿いにぐるりと回らないと行けない。

広い家というのも、なかなか不便なものだ。会う努力をしなければ、例え同じ屋根の下に暮らしていてもなかなか会うことができない有り様なのだから。

祖父が亡くなって以来、祖母は離れの方に引き籠もってしまった。食事も共にしないとすれば、めったに顔を会わせることはない。ゆずるの腹違いの弟 太一も一緒に暮らしているが、部屋が遠いおかげで、食事の時くらいにしかその姿を見かけることは無い。

この家には他に、家政婦として一族の女性とその家族が数人共に暮らしている。一族の者と言っても、本家の血筋から遠いようで、力はほとんどないのだという。

廊下の途中でゆずると別れ、自室に入ると、制服を脱ぎ捨てた。私服に着替えると、スポーツバックを手にする。

学校が受験生の部活動の参加を禁止してしまっているので、近所の体育館にバスケットをやりに行くつもりだ。

約束はしていないが、木村も来ているだろう。もしかしたら深沢先輩も来ているかもしれない。

玄関を出て、神社の方まで出てくると、社の扉が突然開き、中から青年がのっそり姿を現せた。

紫色の長い髪を風に遊ばせてながら、髪と同色の瞳を直久に向け

る。

青年 朝霧は軽い足取りで直久に歩み寄ってきた。

「また玉遊びか？」

「バスケットだ！」

「その何が好きなんだか……」

言うと、朝霧は空に向かって両手を伸ばした。大きく伸び上がる。低く唸ったその仕草は、なんだか動物的だ。

そっぴやあー、狼だっけ。

正しくは、妖狼である。

久し振りに山から出てことをどう思っているのか、朝霧はあちらこちらをウロウロ歩き回っているらしい。

社にいる今日は、かなり珍しい。

「興味があるんなら、一緒に来るか？」

「俺がか？」

「一緒にやるうとまでは言わねえけど……？」

顔から笑みを消し、どうやら真剣に考えている様子を見せる。だが、次の瞬間、朝霧は目を見開き、空を見上げた。

「何か来る」

「へ？」

「直久、両腕を広げて、正面に出せ！」

朝霧の語気の強さに圧倒され、言われるままに両腕を前に差し出した時だった。頭上の空間がグラリと歪み、何か黒い影のようなものが真っ直ぐこちらに落っこちてくる。

ドスツ。重みに耐えきれず、直久は尻餅を着いた。

何かを両腕に受け止めたという感触はあった。しばらく痺れるように肩が痛んだ。両腕もかなり痛い。

「痛っ」

いったい何を受け止めたんだろうと、直久は自分の腕の中を見やっつた。

女の子。自分とさほど年の変わらない少女である。

定規で引いた線のように真っ直ぐな黒髪が、まず目に映る。腰に届く程の長さで、直久の腕の中で扇状に広がっている。

少女が俯いたまま口を開いた。

「ごめんなさい。……こんなところに人がいるとは思ってなくて」

「俺もまさか空から降ってくる人間がいるとは思ってなかった。

ケガない？」

「ないです」

聞き覚えのある声だった。

ゆっくりと直久を見上げた顔も、どこかで見覚えがあった。驚いたような表情。これも見覚えがある。

誰だっけ？

空から降ってくるような人間って、普通の人間じゃないよな。普

通じやないと言え、やつぱりうちの一族のヤツなんだろうな。

「だけど、こんな子、一族の中にいたっけ？」

もつとよく思い出そうと、気が付くと、顔を近付けて少女を覗き込んでいた。少女の瞳に自分の顔が見えて、ハツとする。

「やばっ。近過ぎ！」

慌てて距離を作ると、少女も慌てたように直久から躰を離して立ち上がった。黒髪が揺れる。サラリサラリと音を立てるように。

「早季ちゃん！」

こちらでも聞き覚えのある声だ。黒髪の少女を呼びながら駆け寄ってきた少女。そして、その後ろには少年が。

「早季ちゃん、大丈夫だった？」

こちらの少女は淡く明るい茶髪で、瞳の色も黄色に近い茶色だ。髪の毛の長さは肩くらいで、きつめのウェーブがかかっている。

ストレートとウェーブ、黒と茶色という外見の違いで、パツと見では分からないが、よくよく見ると、二人の少女たちは双子のようにそっくりな顔立ちをしていた。

大きな瞳に、細く形の良い眉。小さな鼻に、薄い唇の控えめな口。数久に似ているのかもしれない。ゆずるにも似ている。つまるところ、直久好みの顔なのである。

二人の少女の隣に立った少年も嫌いな顔ではない。むしろ親しみの湧く顔だ。やはり、どこかで会ったような顔。見覚えがあった。

もしくは、誰かに似ているのかもしれない。

直久は腰を上げると、尻に付いた土を払った。そうしてから、改めて突如として現れた三人の姿を見直した。

12月である。なのに、三人の格好は些か薄着だった。

少女たち二人は制服のスカートに、長袖のシャツ。上着は着ていない。少年の方も制服のズボンに、長袖のシャツ。こちらも上着はない。秋の装いだ。

もしかして。

「うちの一族のヤツだよな？　もしかして、今、時空を越えて来た

とか？ 空から落つこちてきたよな、お前……」

もう一人の少女に早季と呼ばれていた少女を振り返り直久が尋ねると、早季は困ったように眉を寄せた。

「どうする、夕樹ゆづる？」

「どうするって。俺はまずここがいつのどこなのか知りたいな」

「どこって……、朝霧神社でしょ？ 私たちの知っている朝霧神社と変わらないわ」

「んで、たぶん、この人は早季ちゃんの……」

「夢月むづき」

「夢月、余計なことを口にしない方がいい。混乱を招くだけだ」

「そっか……」

どうやら三人の中で決定権は早季にあるらしい。夢月と呼んだ少女を無言の視線で黙らせると、夕樹と呼ばれた少年に向かって早季は頷いた。

夕樹が直久の問いに答えてくれるらしい。彼は振り向くと、表情を真剣なものにして、口を開いた。

「貴方、直久さんですよ？ お察しの通り、俺たちは時空を越えてきました。未来から来たのです」

「未来？」

「直久さん、今、いくつですか？」

「年のこと？ 15だけど？」

「15歳。……それなら、24年後の未来から、俺たちは来たことになります」

「24年後！？」

驚く直久に、早季が無言で頷く。夢月は少し考えるような仕草をして、直久に尋ねた。

「15ってことは、中3だっけ？ 高1だっけ？」

「中3だよ」

「そうすると、夕樹と同じ年だ。うちらより1つ上でせ」

『うちら』とは、夢月自身と早季を指すらしい。 どうつでもいい

情報に早季は顔を顰め、夢月の口を閉ざさせる。夕樹も呆れたように夢月を一瞥し、それから再び直久に顔を向けた。

「俺たちはある夢魔を追ってここまで来ました。あと少しで退治できるという時に、夢魔が時空の穴を開いて逃げてしまったのです」

「夢魔？」

「パノンというピエロの姿をした……」

「パノン!？」

どこかで聞いたことのある名前だと思ったのは一瞬。すぐに思い出して大声を上げた。

それは春の出来事。ゆずるの異父妹である優香の頼みから始まった事件だ。優香の友人が眠り続けたまま目覚めないというので、少女の夢の中に入り、夢魔と対決したのだ。

だが、夢魔を倒すまでには至らず、追い払うような形で事件は解決した。

「あいつがまた現れたのか!？」

やはりあの時に倒しておくべきだったのだ。

そう思った直久だったが、その時のゆずるの言葉を思い出して、首を横に振る。

あの時のゆずるは絶好調の状態だった。それでも逃げようとするパノンを追わなかったのは、パノンが本気を出していなかったからだ。

その秘めた力は得体が知れない。ゆずるは己の力では退治できないと判断したのだ。

あの時に倒せなかったために、未来にその負荷を押し付けているようで心苦しいが、無理だったのだ。

仕方がない。直久は拳を固く作った。

夕樹の話によると、優香の時同様、夢月の友人が何日も眠ったままになってしまったのだという。

早季と夢月が夢の中に入り、夢魔の気配を追ったところ、パノンにたどり着いた。

あと少しというところまでパノンを追い詰めたのだが、パノンは二人の目の前で時空の穴をあけ、逃げてしまったのだ。

早季はすぐにパノンを追い、穴に飛び込んだ。そして、夢月は一度夢から覚め、夕樹と共に早季の気配を追って時空を越えてきたのだ。

「パノンを追って来たということは、アイツもこの辺りにいるってことだよな？」

「はい。何のためにパノンがこの時代にやって来たのかは分かりませんが、早季はパノンを追ってすぐに穴に飛び込みました。飛び込んだ時間のズレで、多少は穴の出口にズレが生じていますが、パノンもこの近くにいます」

「ズレ？」

「数秒遅いだけで、数日の遅れが出る場合もありますし、何十キロも離れた場所に出てしまう場合もあります」

「逆に、後から飛び込んだ方が先の時間に出て来ちゃう場合もあるんだよ」

いたずらっ子のように目を細めながら、夢月が夕樹の説明に付け加えた。一瞬、その瞳が輝いたように見えた。瞳孔が黒を濃くし、大きく開いたように見えたのだ。

ギョツとする。爬虫類の眼みたいだった。

「とりあえず、ゆずるに話した方がいいな。俺にはパノンの居場所なんてサツパリ分かんねえーから」

言ってから、ふと朝霧に振り返る。

「お前、何か感じる？」

「……」

「朝霧？」

眉間に皺を寄せて、先程から黙って佇んでいる。

「おい。目を開けたまま寝てんのか？」

「……ああ？」

「夢魔の気配感じるかって聞いてんだよ。なんか妖しい気配とかし

ねえ？」

「……………」

朝霧は空気の匂いを嗅ぐように、斜め上を見やり、やや首を横に傾げた。そうして、すうつと目を細めた。

「先見だ」

「え？」

顎で示された方を見やると、先見が空を駆けるように石段を上ってくる姿が見えた。その後を追って数久も現れる。

「直ちゃん、ゆずるは？」

「へ？ ゆずる？」

「ゆずるはどこ？」

石段を駆け上ってきた数久は直久に問いかけながらも足を止めず、返事も聞かずに神社の裏の方に駆けていく。

「え？ おい、数？」

呆気にとられた直久だったが、数久を追って長い影が流れたのを見て、我に返った。

長い影　早季の黒髪だった。早季、と呼んだのは夕樹で、夢月は言葉なく早季の後を追った。

「いったい何なんだ？」

「まさかパノンが……………」

自分たちも行きましよう、と夕樹。異論はなかった。直久も後を追って駆け出した。

3・狙いは、ゆずるさんだったんだ

「ゆずるーっ！」

玄関に入つてすぐ数久の悲鳴が聞こえた。ゆずるの部屋からだ。靴を脱ぎ捨てて廊下に行くと、全力で駆けた。

嫌な予感がする。いや、違う。予感ではなく、家の中の空気が淀んでいるせいだ。

泥水のように濁った空気は、どろりと粘るように躰にまとわりついてくる。

躰が重い。これは妖気だ。

窓ガラスに映り込んだ空はどこまでも青く冷たく澄んでいるというのに、直久の躰にまとわりついたそれは生温く淀んでいる。

ガクンと夕樹の躰が沈んだ。苦しそうに膝を着いている。廊下の先を見やると、両手を着いてしゃがみ込んでいる夢月の姿があった。

早季はどうしたのだろうか？

直久は更に廊下を見渡したが、早季の膝を着いた姿は見つけられなかった。

「くそつ。うぜえ！」

カッと気を放つと、直久の回りだけ空気が澄んだ。すぐ脇で夕樹が息を吐いた。

「さすがですね」

「大丈夫か」

腕を掴んで立たせてやる。

夕樹を連れて夢月の元に駆け寄る。直久が夢月にまとわりついた妖気を払うと、夢月はスッキリした顔で立ち上がり、廊下の先を見据えた。

風花

「早季ちゃんが……」

「早季ならこのくらいの妖気、大丈夫だ」

心配なのは、と夕樹は続けた。聞くまでもなかった。直久は二人を引き連れてゆずるの部屋へと駆け込んだ。

「ゆずる！」

襖を勢いよく開くと、まず、畳の上に真っ青な顔をして倒れている数久の姿が見えた。その側に早季。

早季も青い顔をしていたが、夕樹の言うように気を失うほどではないようだ。直久が側に腰を下ろすと、二人の顔色はスツと良くなっ
ていった。

「ゆずる？」

夢月の手を借りて数久は上体を起こしたが、ゆずるは仰向きに躰を寝かしたままピクリとも動かない。

土色の顔を見下ろして、直久はその頬にそっと触れた。ひんやりとした。驚いて、思わず触れた手をもう一方の手で覆った。

「おい、ゆずる！」

躰を揺さぶってみたが、やはり反応がない。まるで死んでしまったかのように、コンコンと静かに眠っている。

「パノンの狙いは、ゆずるさんだったんだ」

「でも、なんでゆずるさんを？」

「早季を倒せないと思ったからだろう。ゆずるさんを消せば、この先、早季が生まれることはない」

「なるほど」

深々と頷いた夢月を早季が睨んだ。

「のんびり納得している場合じゃない。すぐ夢の中に入ろう。」

夢月は私に付いてきて、夕樹は私たちの躰を頼む」

「分かった」

「待て。俺も行く」

時空を越えてきたという三人が勝手に話を進めていることに慌てて、直久は大声を上げた。

「ゆずるのことは俺が守るって決めてんだよ。お前たちを信じていないわけじゃないけど、やっぱりどこの誰だか知らないお前たちだ

けにゆずるを任せられない」

「……」

元々、口数の少ないタイプなのだろうか。早季は無言で直久の顔を見つめている。

早季が何も言わないので、夢月も夕樹も口を開けず、じっとしている。

直久は早季から目を逸らし、数久に振り返った。

「数、太一とババアが心配だ。様子を見に行ってくれ」

悪魔の気配は、日本妖怪たちにとって強すぎる刺激になる。例えば、一昔前の日本のド田舎に、突然、金髪碧眼の外国人がやって来たようなもの。

何事かと妖怪たちは悪魔の気配を追って集まり、妖怪たちが集まればそれだけ妖気が籠もる。

妖気が濃くなれば、次は霊たちが騒ぎ出す。特に目的もなく彷徨っている霊たちが。

浮遊霊が集まれば、その負の力を追って悪霊たちも集まってくる。

妖怪と霊が混在した空間を想像してみたい。　　実に、嫌なものがある。

悪霊は肉体を欲して、九堂家の者に襲いかかってくるだろうし、妖怪も何をしてかしてくれるか分からない。

数久が頷き、腰を上げかけたのを見て、直久はその腕を掴んだ。手のひらに力を集中させる。

「護符だ」

「ありがとう」

朝霧を式神にしてから、直久は数久よりも強い力を得ている。以前は逆の立場で、数久に護符を貰い、身を守って貰っていたが、今なら直久が弟を守れる。

「太一とババアをここに連れてきてやってくれ。ここには俺が張った結果がある。　　それから、鈴加を呼んで、すでに集まってきた

しまった悪霊たちを除霊しておいてくれ」

「うん。分かった」

「気を付けるよ」

「直ちゃんも」

ぱつと腕を放すと、数久は立ち上り、直久から数歩離れた。ふと思い出して振り返る。

「……夢月ちゃんも気を付けてね」

「え」

「ケガしたら、夢の中でも痛いよ？」

「あー。バレてた？」

「一目でね」

微笑んで立ち去った数久に夢月は頭を掻く。

「さすがは数くんだよねえ」

「あの様子だと、夢月の母親が誰かっていうのもバレてそうだな」

「あなどれん」

すでに姿のない数久を目で追うように、しみじみとして言った夢月に夕樹も頷く。

そんな二人を放っておき、早季はゆずるの額に手を触れた。

「夕樹、ここを頼んだよ」

「ああ」

「夢月、行くよ」

それから、と直久を見やる。差し出された手を、直久は深々と頷き、握った。

直久のもう一方の手を夢月が握る。とたん、すんと闇が落ち落ちてきて、直久は自分の躰が傾いていくのを感じた。

4・助けに来たから、元の姿に戻ってくれる？

瞼を開くと、見知った天井が見えた。

つい先程までいた部屋と、まったく同じ部屋だ。

「ここ、ゆずるの部屋だ」

ここは本当にゆずるの夢の中なのだろうか。

疑いたくなる程、先程とまるで変わらない風景。

だが、部屋の中央に横たわっていたはずのゆずるの姿がなく、夕樹の姿も側に見えなかった。

直久は繋がった早季と夢月の手が離れないように、そっと上体を起こした。

さすがに両手不自由な状態で起き上がるのは、辛い。

とりあえず起きて貰おうと、名前を呼んだ。

「おい。早季、起きろ。夢月」

ガバツと、ほぼ同時に二人は起き上がった。

両腕を引っ張られて、直久は眉を寄せる。

「お前ら、何だ？ 双子か？」

一卵性の双子である直久と数久は、時々、こういう風に仕草が揃ってしまったりする。

夢月がケラケラ笑って、片手を振った。

「よく言われるけど、違うよ。うちらはイトコなの。父親同士が兄弟で、そっちが双子だったってわけ」

「なんだ。二人とも父親似か？ 父親が双子で、父親似同士の従妹なら、そりゃあ、顔も似るわな」

「まーね」

ちなみに、と夢月は人差し指を立てた。

「夕樹ともイトコだよ。夕樹の母親は、うちの父親のお姉さんだから」

「へえ」

「夢月」

低めた声が響く。

早季に短く咎められて、夢月は肩を竦めた。

「ゆっくり話している場合じゃない。急ごう」

直久の手を放し、一人立ち上がった早季に直久は慌てる。

「手を放して平気なのかよ？」

「なぜ？」

「前にゆずると夢の中に入った時、時空の狭間で迷子になる可能性があるからって、ずっと手を繋いだままだったからさ」

「……でも、はぐれても、一人で帰れるでしょ？ 直も夢月も」

「帰れると思うけど……」

早季に、直、と呼ばれてドキリとする。

声の響きがどこかゆずると似ているような気がした。

夢月も直久の手を放し、立ち上がる。

ここを開いたらいったいどんな景色が広がっているんだろうね、と笑いながら、襖を横に引いた。

中庭。

見慣れた景色に三人は肩すかしを食らったような顔になる。

「普通だ」

「夢としては、つまらないよね」

同意してくれたのは夢月で、早季は無言で廊下に足を出した。

しばらく家の中を捜し歩いたが、ゆずるもパノンの姿も見つからなかった。

家の外には出られない。

玄関はまるで絵に描かれているかのように凹凸がなく、押しても引いても開く気配がないからだ。

裏口の方も同じ。

どうやら、この夢の舞台は家の中だけのようだ。

「そう言えば、この家の周りって、結界が張ってあったはずだよなあ。なんでパノンの奴、侵入できたんだ？」

直久が問うと、夢月は小首を傾げた。

「悪魔には通用しなかったんじゃないの？　　それが、パノンの力の方が結界よりも勝っていたか。どちらにせよ、こちらが駆け付けた時、結界は破られていたわけだし」

結界は破られていた。

だから、家の中に妖気が充満し、霊が彷徨っていたというわけだ。「悪魔って、そんなに強いのか？」

「一言に悪魔と言っても、階級があるんだよ。それも実力を基準にした階級と、生まれの良さを基準にした階級。パノンの後者の階級がどれ程なのかは分からないけれど、前者はかなり上の方だと思う。S級とは言わないけれど、A級クラスくらいかな。　　ねえ、早季ちゃん」

「Bの上でしょ」

「ええつ。B？」

どうやら階級は、CよりもB、BよりもAの方が勝り、Aの上をSと言うらしい。

「生まれの良さの階級って言うのは？」

「ハツキリ言って、こちらにとって悪魔は専門外だから詳しいことは知らないけれど、皇帝がいて、王がいて、公爵がいて、侯爵がいて、伯爵がいて……」

「貴族みたいなもんか？」

「そうそう、貴族階級。　　日本の妖たちにも実力を表したABCはあるけれど、貴族階級は存在しないからね。強さこそが絶対な妖怪よりも、悪魔の方が上品というか陰湿なのかも」

より力の強いものがその土地を支配する。

駆け引きなどない。

強いか弱いか。

戦って勝てば、支配者となり、負ければ、殺されるか、自ら土地を去るか。

基本的に群れず、実の子であっても、独り立ちできると判断すれ

ば手放す。

それが日本の妖だ。

再びゆずるの部屋に戻ってきた。

誰もいない部屋を見渡して、直久は眉を寄せる。

「なんでどこにもいないんだ？」

「隠れているのかも……」

「隠れる？　なんで？」

「パノンが夢の中にいるからでしょう？」

「うん。それ、考えられるよね。賢いゆずるさんなら、パノンに掴まらないように隠れているのかも」

「隠れると言ってもなあ」

果たして、いい隠れ場所なんてあったらどうか？

そう言えば、すごく小さい頃にこの家で隠れん坊をしたことがあった。

4歳から歳か。直久の躰に朝霧の力の一部を封じられる前のことだ。

鈴加と貴樹と、ゆずると直久と数久。

あと数人、一族の子どもたちがいた気がする。

その時、ゆずるはどこに隠れていただろう？

直久は瞼を閉ざした。

脳裏の奥に浮かんだ一つの場所。

確か、あそこは。

「直？」

二人を置いて、直久は小走りに廊下に行く。

家の北東に位置する蔵に向かった。

蔵の扉は薄く開いていたが、あれは『ひっかけ』なのだ。中ではない。

蔵の後ろへと回り込み、直久は大きな松の木の後ろをひよいと覗いた。

風花

「ゆずる」

淡い焦茶色の髪の子。

縮こまるように膝を抱えて座っている。

「あれ？ ゆずる？」

見上げてきた顔は確かにゆずるなのだが、どうも造りが小振りだ。

どう見ても、5歳の男の子。

このくらいの年齢の子どもは性別の見分けが付きにくい、身に付けている服の色彩で何となく区別を付けるものだ。

この時から男装をしていたゆずるの服は、当然、男の子が好む色彩だった。

「ゆずるだよな？」

「直」

「あ。やっぱり、ゆずるか」

聞き知った声よりもやや高い。

だが、確かにその子どもはゆずるで、気まずそうな表情を浮かべている。

「なんで、小さくなってんの？」

「小さい方が隠れやすい」

「ああ、なるほど」

夢だから、ますます何でもアリなのかもしれない。

深く考えるのはやめて、とりあえず頷いてみた。

「ちっさいゆずるもすっごい可愛いんだけど、助けに来たから、元の姿に戻ってくれる？」

やっぱり、今のゆずるの方が可愛いし、好きだから」

「……」

瞼を閉ざして、一言二言、ゆずるは何かを静かに呟いた。

そして一瞬で手足が伸び、見慣れた姿に戻った。

ようやくホッとして、直久はその身体を抱き寄せた。

「今さ、家の中すっげえことになってんだぜ。妖気がどろどろに渦巻いてた」

「結果が破られた」

「パノンに会ったのか？」

「夢に入られる時に、一瞬。　　すぐに逃げたから」

「よく逃げたな。無事で本当に良かった」

「……うん」

ところで、とゆずるの声音が変わる。

両手を直久の胸に付き、躰を引き離すと、直久の後方を静かな目つきで見やる。

「お前はいつたい誰を連れてきたんだ？」

「え？　……あ」

振り返ると、早季と夢月が後を追ってきていた。

直久とゆずるのラブラブに遠慮したのか距離を置いていたが、ゆずるが目線を向けたことに気が付いて近付いてきた。

「なんか、時空を越えてきたらしいぜ」

「時空を？」

「未来から来たって言った」

「未来……」

早季を見て、夢月を見て、再び早季の顔をじっくりと眺める。

ゆずるは考え込むような仕草をすると、目を細めて、早季に向かって言葉を放った。

「お前、私の娘か？」

「はあ！？」

驚きの色を顔に浮かべたのは、ゆずる以外の3人皆だが、もつとも驚愕したのは直久だった。

夢月はすぐにケラケラと笑いだしたし、早季は肩を竦めた。

「だから、気が付かないのは直ちゃんくらいなもんなんだよ。数くんにもすぐにバレたし」

夢月の爆笑は止まらない。

ゆずるにバレたことよりも、今の今まで一緒に行動していたのにまったく気が付かなかった直久を笑っているらしい。

直久は顔を顰めた。

「え、マジでえ？」

「未来から来て、一族の者で、顔そっくりな二人の父親は双子と言ったら、普通気付くし、

言われなくとも一族の者なら気で気付こうよ」

「双子ってことは、どっちかが俺の娘で、どっちかが数の娘ってことだよな？　っていうか、さっき、ゆずるが自分の娘とか言ってたかったか？……ええっ！？　おい、ゆずる。どっちがお前の娘で、父親はどっちだよっ」

「直、ばか」

呆れ顔のゆずるに代わって、夢月が笑いながら説明してくれる。

「直ちゃんの娘は、早季ちゃんだよ。私は数くんの娘だもん。んで、安心して。ゆずるさんの夫は直ちゃんの方だから」

「だあーっ、良かった。……ていうか、マジでえ？」

頷くゆずるの顔を振り返って、本当のことなのだということを知る。

直久は早季の再び早季の顔をまじまじと見つめた。

道理で俺好みの顔をしているハズだ！

一人は数久の娘なわけだし、もう一人はゆずるの娘なわけだ。

「うん。俺の娘だと思ったら、俄然可愛く見えてきたあー。俺にも似ているけど、ゆずるにも似てるし、すげえ可愛い！」

「直、抱き付くなよ。早季が困っているだろっ。このバカ！」

「ゆずるったら、妬いてる。自分の娘相手に。超可愛い。もう、ゆずるもギョウ」

早季を解放して、ゆずるを抱き締めると、夢月はますますケラケラ笑った。

「この感じ懐かしいよねえ、早季ちゃん」

「……」

「早季ちゃん？」

振り返ると、早季は俯いていた。

それに気付いて夢月の笑いは凍り付いた。

「大丈夫？」

気付いて、直久もゆずるを放して、早季の顔を覗き込んだ。

「おい、どうした？」

「……」

「早季？」

かくん、と早季の膝が折れ、早季はその場にしゃがみ込んだ。

5・自分だけ良ければいい、って言いたい

「……死んでいるんだよ」

「え？」

「死んだんだ」

誰か？という言葉を呑み込んで、直久はゆずるを振り返った。ゆずるの顔から表情が消える。

「私か？」

言葉なく、早季が頷いた。

なぜ、とゆずる。

「妖猫に殺されたんだ」

「そんなに強い妖猫がいるなんて。急に強くなるなんて考えられない。そんなに強いのなら、今の時代でも噂くらい聞こえてきそうなものだが」

「その妖猫はB級妖怪だった」

「なら、その日は運悪く満月だったとか？」

「違う。私のせいなんだ」

「早季ちゃん……」

頭を左右に振る夢月。

だが、慰めの言葉はない。

早季は上着を捲り、横腹をゆずるに見せる。

ゆずるの顔がハツとなった。直久も目を疑う。

そこには黒ずんだ染みのようなものが浮かび、染みはまるで猫の顔のような形を作っていた。

「妖猫は死に際、私に呪いをかけたんだ。初めはもっと小さな染みだった。黒子かと思っていた。だけど徐々に大きくなってきて、今では、あの妖猫の顔そっくり……」

ゆずるの腕が伸ばされる。

そっと、腫れ物を触るように、早季の脇腹に触れた。

瞼を閉ざす。

「……これは死に至る呪いだ」

早季にとつて、言われずとも分かっていたことのようなだ。

これ以上晒したくないと、早季はゆずるの手から逃れると、脇腹を隠した。

「だが、九狼の名を継いでいる者ならば、すぐに死ぬという呪いではない。その間に解く方法を捜せば……」

「捜している、ずっと！　　だけど、見つからないっ」

「諦めるな。きっと見つかる。もっとよく捜すんだ！」

「ない！だから、あなたは死んだんだ」

「何？」

ゆずるは顔を顰めた。

「どういう意味だ？」

「今になつた分かつた。パノンは私に追い詰められて、この時代に逃げてきた。九匹の妖狼すべてを式神にしている私を倒せないと知つたアイツは、私を消すために、この時代であなたを殺そうと思ひ付いたんだ。そして、たぶん私はあなたと共にパノンをやつつけた」

やつつけた、と過去形で言つた早季に、ゆずるはますます怪訝な顔をした。

だが、何かを感じ取つたらしい。顔色を変えた。

早季は言葉を続ける。

「あなたは呪われた私と出会つて、私の呪いをその身で引き受けてくれたんだ。そして、24年後、妖猫が現れた時、妖猫はあなたにかかつた呪いに気付き、その呪いでもつてあなたを殺した。死を目前にした妖怪がかけた呪いだ。すぐに死に至らないものだとしても、それは強力であつて、更に力が加われば、即死する」

「そうだな……」

「そうだなって、ゆずる。　　そんなのウソだ！」

ゆずるが死ぬ？

「俺はそんなの信じねえっ！」

「直……」

「ゆずるは信じたのかよ？」

「信じる、信じないも、娘が言っていることだぞ？」

「そんなら、早季が俺の娘だってことも信じない！」

「……」

「……死なせないよ。あなたのこと、二度と」

ポツリと、早季は零した。

驚いて、直久とゆずるは早季を振り返った。

早季は己の脇腹をきつく両手で押さえ、下唇を噛み締めた。

「早季ちゃん？」

「……渡さない。この呪いをあなたに渡さなければ、24年後のあなたが死ぬことはないんだ」

「だけど、そしたら早季ちゃんが……」

「……」

「ダメだよ、早季ちゃん。私も夕樹も、九堂家の分家の者として許さないよ。本家の人間がみすみす死んでいくのを黙って見ていられないっていうのが、分家の人間なんだからねっ」

「私が死んでも、直とゆずるが生きていれば、二人が私の弟なり妹なりを生んでくれるんじゃないの？」

「生めないよ。ゆずるさんは早季ちゃんを生んだ時に、もう子どもを望めない躰になったって聞いたよ。数くんから……」

「ウソ。そんな話聞いてない」

「早季ちゃんの前の子どもを流産しているから。それも二回も。」

だから、早季ちゃんが死んじゃったら、本家の血筋が途切れちゃ

う！

「太一さんがいる」

「妖狼たちは鬼の血を認めないっ」

「だったら、どうしろっていつの？！」

夢月はグッと口を閉ざした。

その答えは聞くまでもない。

解ける見込みのない呪いなど、早季に持ち続けて欲しくないのだ。

瀕死の妖怪の呪い。

普通の者なら耐えられない強力な呪いを、九狼の名を継いだ者ならば耐えられるというそのわけは、治癒能力に優れた刀守りと防御力の優れた迷い土を式神にしているからだ。

だが、いつかは、呪いは彼女たちの力よりも勝り、死を招くだろう。

早季を救いたいならば、ゆずるに早季の呪いを引き受けて貰えばいい。

ゆずるを救いたければ、ゆずるが早季から呪いを引き受けるのを止めればいい。

直久は頭を左右に振った。

「例えばの話だけど、もしも今、ゆずるが早季の呪いを引き受けなかったとする。んで、24年後、その妖猫が早季に呪いをかけようとする前に、妖猫を倒したらいいんじゃないの？」

「それができるのならば、いい案だと思う。けど、それでは、今、目の前にいるこの早季が救われない」

「そういうもんなの？」

「パラレルワールドの話を知っているだろう？ ちょっとした行動の違いで、いくつもの世界が生まれてしまうという話を。一度生まれた世界は消えない。異なる次元で流れ続ける。もしも私たちの時間の流れで24年後の早季を救うことができても、今この早季を救わなければ、もう二度と、この早季は救われないんだ。この早季は妖猫の呪いで死ぬことになる」

「なら、俺はゆずるか、この早季の命を天秤に掛けるって言われているのか？」

24年後にゆずるを失うことになるか。

それとも、いくつかあるパラレルワールドの中の一人の娘を失う

ことになるのか。

「俺はお前を失いたくない……」

「だけど、もしも、お前の娘を別の次元が救ってくれるとしたら？」

「俺は……」

分からない。

ウソ。分かっている。ちゃんと。

だけど、認めたくない。

「自分だけ良ければいい、って言いたい」

「……うん」

目頭が熱くなった。

ゆずるが直久の歪んだ顔を隠すように、抱き締めてくれた。

なんだか、ますます泣きたくなった。

6・春じゃないのに

不意に風向きが変わった。風に乗って、酒の匂いが漂ってきた。

「おい、早季。見つけたぜ」

赤茶色い髪を風に靡かせて姿を現せたのは、先見だった。後ろに風通いもいる。

「見つけたか」

「あつちだ」

「夢月、行くよ」

どうやら、この先見と風通いは早季の式であって、この時代の彼らではないようだ。

ゆずるも彼らを呼べば、彼らそっくりな彼ら自身がやって来るのだろうか？

疑問を感じながら、直久とゆずるも二人の後を追った。

先見の軽やかな足が止まったのは、中庭。

この地に九堂の家が建てられた時に植えられたという、樹齡何百年という桜の木が佇んでいる。

さあー、と風が吹き抜けた。桜の花びらが舞う。

真冬に？

驚いて見上げれば、桜の木は満開に花が咲き乱れていた。

春じゃないのに。

これは夢なのだと思います。それも夢魔が入り込んだ夢だ。

「直、桜を見つめるな。あんな禍々しいものを」

「ああ」

禍々しい。その言葉は正しい。ピンク色の花びらを連れた生暖かい風は、淀んだ気配を漂わせている。

悪魔の気配。記憶のある気配だ。

「パノン、出てこい！ いるんだろう、そこに！」

早季が声を張り上げた時、桜の木の幹が不自然に盛り上がった。まるで瘤ができたように。

瘤は見る見るうちに大きく膨れ上がり、人型を取った。ニツと笑う。笑った口は耳まで裂け、幹の色から朱へと変わった。そして、次の瞬間、すべてに色が変わる。

幹から離れ、空を飛んだその肌は、異様に白い。先が二股になっ
っているとながり帽は、紫。

継ぎ接ぎだらけの派手な服は、キラキラと金色がかつた色で光っている。ぶかぶか過ぎる青いズボンに、爪先が上を向いた黄色い靴。

狂気のピエロ。 パノンだ。

「お久し振り、九堂家の方々」

「お前の企みは外れた。お前はこの夢で、その存在を完全に消すことになる」

早季だけではなく、ゆずるまでも相手に戦わなければならないパノンは、確かにしくじったとしか言いようがない。そのことをパノンも承知しているようで、夢魔は醜い笑みを浮かべた。

「君たちまで、この時代にやって来るとはね。確かに予定外だったよ。もつとも僕は、もう少し前の時間にやってくるはずだったんだ。あの春のあの時、そちらの九狼殿と初めてお会いした時に」
早季から視線をゆずるに移した。

「あの時に殺しておくべきだったと思い直してね。殺しに来たのさ。だけど、ズレが生じて、ここに来てしまった。ズレは君のせいだ。君までもが時空の穴に飛び込んできたからだ」

あれは僕専用の穴だったのにさ、とパノンを自嘲の笑みを浮かべた。

「あの時だったら、そのそいつもまだ力がない状態だったし、九狼殿はまだ次代と呼ばれ、手持ちの妖狼も五匹しかいなかった。あの時だったら、殺せたはずだった。それをよくも」

ギロリと、パノンの目が大きく見開かれ、早季を睨み付けた。

「何もかもお前のせいだ！」

ドスツ。重みのある物が勢いよく落ちてくる気配がして、咄嗟にゆずるを突き飛ばし、共に地面に転がってから、それを確かめた。斧が突き刺さっていた。

そう言えば、このピエロ、笑いながら斧を振り回してくるんだっけ。

めぐるめく思い出に浸って見たが、そうそう暢気なこともしてられない。急いで起き上がって、パノンを振り返った。

早季が火刈りを呼び、炎の玉をパノンに放った。その間に、ゆずるは迷い土を呼び、空を逃げるパノンを地に拘束する。爪先が上を向いた黄色い靴が、見る見るうちに泥沼に沈んでいく。

「ちくしょう」

こんなハズではなかった、とパノンが呻く。

この時代でゆずるを喰らえば、自身の力は増幅する上、己を倒す程の力を持つ早季は生まれてこない。

完璧だった。

ずっと九堂家の者の血肉を喰うことだけを考えてきた。喰らえば、より強い力を得られるからだ。

だが、更に、より強い力を得るには、喰らう血肉の力もより強い方がいい。

『九堂家の者』と一言で言っても、その時代によって力に多少の差があることに、パノンが気付いたのは、数百年前のことだ。

もう少し強い力を持った者が現れるかもしれない。

100年前、九堂家の次代を見て思った。だから、100年待ち、ゆずると出会った。

もう少し。

そう思ってしまったのが、間違いだった。ゆずるは今まで見てきた九堂家の者の中でも、かなり強い力を持っていた。この血肉を喰らえばどのくらいの力を得られるのだろうかと思像して、震えが

きたくらいだ。

だが、予想以上の抵抗に遭い、気が削がれた。もう少し、と思っ
てしまったのも、それが原因だ。

「ちくしょう！　ちくしょう！　ちくしょう！」

早季に向かって斧を投げつける。己の欲に嫌気が差す。

要は、待ちすぎたのだ。

次にパノンの前に現れた『九堂家の者』は、パノンの力を越えて
いた。

むちゃくちやに両手を振り回し、次から次へと斧を放る。だが、
早季とゆずるがそれぞれ風通いを呼び、その風で、すべての斧の軌
道を変えてしまっている。ザクリ。ザクリ、と斧は地面を抉って転
がった。

「先見、風通い、火刈り」

ゆずるが同時に三人の名を呼び、大きく両手を振り上げ、振り下
ろした。早季も片手を振り下ろす。

「朝霧、トドメだ！」

三匹の狼が線のように駆け、パノンに襲いかかった。

パノンは一匹目を避けた拍子に、二匹目によって掠り傷を負い、
怯んだところ三匹目に肩を浅く抉られた。

肩の痛みに顔を歪めると、それを見下ろすように、紫色の長い髪
を靡かせた青年が目の前に立っている。

朝霧だ。彼は、ふっと不敵な笑みを零すと、その長い爪でパノン
を頭のでっぺんから縦に引き裂いた。

ザッ。パノンに走った四本の縦線。

地にできたひび割れのようなそれから、どくどくと、どす黒い液
が流れ出てきた。これがこの悪魔の血なのだろう。

「ぐわあああああ~~~~~」

醜い悲鳴を上げて、パノンは顔面を抑え、のたうち回る。

再び朝霧が爪を払う。パノンの右腕が跳んだ。払う。左足が跳ん
だ。

左足でパノンの下半身を押さえ付け、右足で上半身を蹴り飛ばすと、ピエロの躰は二つに千切れた。

「朝霧、遊ぶなっ」

「徹底的にやらないと、悪魔は死なないぞ」

「単に、あんたが悪魔嫌いなんでしょう？」

「そうとも言っ」

朝霧は早季に、ニツと笑った。その顔は直久の知っている朝霧とは比べものにならない程、穏やかで、優しい。

朝霧は最後とばかりに右足を大きく振り上げ、パノンの胸に向かって振り下ろした。

ズボツ。足は胸を貫通して、背中から飛び出した。だが、ぴくん、ぴくん、と二度痙攣した躰は、それでもまだ生きていたようだった。

「さすが、これだけやっても悪魔は死なないな」

「封印するしかない」

「封印？」

「封じて、本家の蔵にしまい込むか、魔界に送り返すか」

「ゆずるが提案すると、朝霧は早季に振り返った。

「どうする、早季？」

「また出てこられたら困る。魔界に送ったら、パノンの仲間の悪魔がいるかもしれない」

「そんな仲間がこいつにいるようには見えないが？」

「うする？ 蔵か？」

「なら、ど

基本的に、人間界に現れた異界のモノは、それがいるべき世界に返すというやり方を、ゆずるは取っている。特に霊に関する扱いは、徹底している。

そして、相手がその土地古来の神であったり、妖だった場合、人に害を及ぼさないモノであれば、手を出さず、見て見ぬ振りをする。宥め、説き伏せ、その憂いを取り除いて、人の住処から距離を持つて貰うこともある。その存在を完璧にまでも消してしまうような

ことはしないものなのだ。

だが、例外もある。言葉にまったく耳を貸さないモノは、神であつても妖であつても同じ、力でもつて、その存在を消す。それは人を守る行為であると同時に、他の神や妖を守ることに繋がつていた。

この悪魔の場合もこれに等しい。

大人しく魔界に帰るモノであつたのならば、道を標して返すが、このピエロは今後何度でもこちらに渡つてくるだろう。その度に、この地を騒がす害となる。

「夢月、お願い」

早季は従妹に振り返り、夢月は、了解、と笑つて瞳を輝かせた。爬虫類の瞳。黒々とした丸い瞳孔を大きく開く。

次の瞬間、夢月の輪郭がぼやけ、溶けた。

溶けた？

驚いて目を見張る直久とゆずる。夢月の躰が変化していく。

「……蛇」

思わず呟いたゆずるの言葉を、直久も声なく呟き返して、呆気に取られる。すでに夢月は人の姿をしていなかった。

大蛇。それは10メートルを超す長さの蛇だった。胴回りは1メートルくらい。色は白。眩しいくらいに純白の大蛇だ。

「夢月」

早季がパノンに向かって真つ直ぐに腕を伸ばすと、大蛇は大口を開けて、ピエロに飛び掛かった。

ペロリ。一呑みだった。

大蛇は満足そうに目をくりくりと瞬かせると、再びその輪郭をぼやけさせ、人の姿に戻った。

夢月は腹をさすりながら、小さなゲップを一つ。

「あー。満腹」

「お腹、壊さないでしょうね？」

「分かんない。悪魔なんて初めて食べたし」

「ちょっと待て！ マジかよっ！ マジで喰ったのかよ!？」

慌てる直久に、夢月はちよつと振り向いて、ニヤリとわざと齒を見せて笑う。

「美味しく頂きましたー。もうしばらくは食べなくても大丈夫な力ンジィ〜」

「に、に、人間じゃねえーっ」

「ひどい！ 早季ちゃん、今の聞いた？ あなたのお父さん、ちよつとひどくない？」

「てか、蛇に変身した時点で、すでに人じゃねえーっ」

今更な話だが、九堂家には何代にも渡つて、妖怪の血が混ざっている。人間離れた力を持っているのもそのためである。

だが、変身した一族の者を見たのは、直久にとってこれが初めてだった。しかも、悪魔を喰ったのだ。

可愛い顔して、なんつーことを！

双子のように早季と同じ顔をした夢月が、一瞬にして大蛇に変身してしまった光景は、後々まで悪夢として見てしまいそうだ。

「ゆずる、こういうのって、よくあることか？ 他にも一族の中にいる？」

「お祖母様はイタチに変身すると聞いたことがある。けど、実際に見たことはないな。他には知らない」

ゆずると直久の祖母は、イタチの妖怪を父親に持つのだ。夢月の変身を目の当たりにして、さすがのゆずるも驚いているようだ。響きの弱い声を出す。

「夢月の父親は数なんだよな？ いったい、数は何と結婚したんだあーっ」

「あはははは。そんなの決まってるじゃん。私のお母さんは蛇だよん」

よほど直久は動揺しているのだろう。夢月はケラケラ笑った。

「私なんて可愛いもんだよ？ 華月兄ちゃんや美月姉ちゃんなんて、もつと大きな蛇に変身するし、目から光線が出せるんだよ」

「人じゃねえ……」

どうやら、夢月には兄と姉がいるらしい。

蛇兄妹の兄妹喧嘩は、さぞかし大量に血の雨が降ることだろう。想像してゾツとする。

さてと、ゆずるは早季を振り返った。

「そろそろ目覚めるとしようか」

「はい」

早季はゆずるの歩み寄ると、その額に片手を触れさせた。もう一方を直久に差し出す。

直久が握ると、直久のもう一方の手を夢月が掴んだ。

目を開いて。

ゆずるの声の響きに似ていたが、早季の声だったのかもしれない。

分からない。それはただ静かに響いて、徐々に小さく、やがて聞こえなくなった。

7・引き受けてやる

白。

霧の世界の中、直久は一人で佇んでいた。

ふと見やると、霧の中、薄く人影が見えて、何となく彼女だろうと思った。

はつきり見ることはできない。だけど、感じる。

ああ、彼女だ。

朝霧は時々、直久の躰の中に潜り込んで、直久と心を共有する。

彼女を懐かしく思うこの心は、直久のものではなく、朝霧のものであった。

直久の中で朝霧が身動いだ。

駆けたい。駆けて、彼女を捕まえたい。そう、朝霧が望んでいる。だが、直久はピクリとも足を動かさそうとはしなかった。

霧の向こうは現世ではない。だから、行くことはできないのだ。

白。

乳白色の世界で、彼女は静かに笑った。

そして、消えた。

瞼を開くと、ゆずるの顔が目の前にあり、思わず赤面する。どうやら、なかなか目覚めない直久を心配していたようだ。起き上がると、ホツとしたように息を吐き出した。

「直?」

「朝霧はどこだ?」

呼ぶとすぐに声が返ってきて、部屋の隅にふっと姿を現せた。

「ここだ」

「……夢を見ただろう？」

「見たのは、お前だ」

「夢の狭間で人と会った。あれは小夜だ。　　違うか？」

「もう消えた」

やはり小夜だったのだろう。朝霧は紫色の髪を左右に揺らしながら、直久の側までやってくると、隣にすんと腰を下ろした。

「　　だけど、見つけた」

「うん」

「　　いや、これから見つかる」

「そうだな」

直久はゆずるは見て、それから早季に目を向けた。

「早季。お前だったのか。お前が小夜の生まれ変わりだったんだ」

「え？」

「俺は朝霧と、早季の生まれ変わりを捜す約束をした。それがお前だったんだ！」

それが自分の娘だったなんて！　　すっげえ、偶然。捜す手間が省けたような、だけど、まだ生まれてもない娘のことだ。なんだか微妙な気持ちである。

直久の顔が顰められたのをみて、朝霧が嗤った。

「直、当然、娘は俺にくれるんだろうな？」

「なんでそういう話になるんだ？」

「俺の小夜への想いは知っているだろ？　　だから、捜す約束をしてくれた。違うか？」

「違うないけど」

「お前は当然、小夜の生まれ変わりと俺がくっつけばいいと思っていたはずだ。それが自分の娘だったと知って、意を変える気か？」

契約違反は喰い殺してやる、と朝霧が口をガバリと開けて、牙を光らせた。直久はますます顔を顰める。

「今、俺を喰い殺すと、早季は生まれなくなるぞ？」
「……」

「せいぜい早季が生まれるまで、俺のこと守り抜いてくれよ。その働きによつては、考えなくもないし」

「言ったな。しっかり聞いたからな」

「はいはい」

生まれてもない娘の将来を軽く約束してしまった直久に、ゆるるは当然いい顔をしない。

早季の顔を見やり、それから直久の袖を引いた。直久も早季を見る。

「どうした？」

「知らなかった。私が小夜の生まれ変わりだったなんて。だから、朝霧は私のこと……」

「早季？」

「私は九狼で初めて9匹の妖狼を式にした。それが私の誇りだったのに。朝霧が私の力を認めてくれたことが、すごく嬉しかったのに。それは、私が小夜の生まれ変わりだからなんだ」

「早季ちゃん、それは……」

夢月が何かを言おうとして、早季に睨まれる。

「夢月、あんたは知ってたわけ？ 私が小夜の生まれ変わりだったこと……」

「知らないよ。初耳！」

「夕樹は？」

それまで眠っていた者たちの躰を守っていた少年も、早季の問いに首を横に振る。

「……そう」

俯いてしまった早季に、直久とゆずるは顔を見合わせる。

その思いを読み取るうと試みてみたが、彼女の心は分厚い壁に阻まれていたようで、ちらりとも分からなかった。朝霧が直久の肩を掴んだ。

「俺は二度と小夜を失いたくない。分かるよな？」

早季にかけられた妖猫の呪いのことだと、すぐに分かった。

その呪いを引き受けられるのは、ゆずるだけだ。だけど、そんなことをすれば、今度はゆずるが命を落とすことになる。

ゆずる、と呼んで、直久は彼女に振り返った。

自分からゆずるにどうしろとは何も言えない。言いたい気持ちはあった。だけど、言えない。

ゆずるの意に任せるしかなかった。

「早季、手を出せ」

「いや」

「出せ。引き受けてやる」

「嫌だ」

頭を左右に振ると、長い黒髪は大きく波を打って、光の欠片を散らす。

ゆずるの髪は茶色く柔らかだから、こうはならない。光は反射されるよりも、吸い込まれていくように見えるのだ。

早季の手を取ってゆずるはその身体を自分の方へと引き寄せた。

「時間はまだある。きつと呪いを解く方法を見つける」

「きつと見つからない」

「見つからなければ、24年後、私は妖猫に近付かなければいい。

近付かなければ殺されることはない。そして、もっと時間をかけて、呪いを解く方法を捜す」

「……」

早季の躰を力強く抱き締めて、ゆずるは口の中で一言二言何かを呟く。唄うように囁いて、早季の躰から呪いを自分の方へと移していく。

がくん、とゆずるの躰が傾いて、慌てて直久が支える。早季も顔を青ざめさせて、ゆずるの腕を掴んだ。

「おい、大丈夫か？」

「……大丈夫だ。早季、気分は？」

「すつきりした感じ」

「だろうな。こんな禍々しいものを体内に入れておいて、よくもまあ、あれだけ自分の力をだせるもんだ」

「そんなに強い呪いなのか？」

「……大丈夫」

絶対ウソだということは、表情を見れば分かる。

そのうちに慣れると、ゆずるは言うが、果たしてどこまで慣れるものなのだろうか？

いずれ死に至る呪い。そして、24年後に現れる妖猫に結びつく呪い。

「刀守り。迷い土」

二匹の妖狼の名前を呼んで、一息付くと、ゆずるはずいぶんとラクになったようだ。

二匹の力が呪いを抑え込んでいるのだろう。ゆずるは、不安げな顔をしている早季に向かって淡く微笑んだ。

「もとの時代に帰るんだろ？ 見送るよ」

「うん」

どうやら、家の中に入り込んでしまった低級霊などは鈴加たちが被っておいてくれたらしい。

直久たちがゆずるの部屋から居間の方へとやってくると、両手を広げて突進してきた。

「きゃあー。見てよ！ この子が私の未来の息子なの！」

「鈴加、その子、驚いているから」

放してやれ、と貴樹。鈴加に抱き締められているのは、夕樹だ。

早季や夢月の従兄で、彼女たちの父親の姉の息子ということとは、つまり、鈴加の息子ということになる。

そのことを直久は現状を見て、ようやく知った。

「顔は……貴樹似かしら？ 性格は……貴樹似っぽくない？」

私似なら、もっと、若い母親を見て、きゃあきゃあ騒ぐはずだもの！

「それは良かった。鈴加似の息子なんて、考えただけでも頭が痛いからな」

「どつという意味よっ」

「鈴加は一人で十分だっという意味だよ」

「だから、どつという意味よ！」

夕樹を挟んで痴話喧嘩を始めた二人を横目に、直久は部屋の中を見渡す。

また、ずいぶんと鈴加は派手に暴れてくれたらしい。家具はメチヤクチャだし、畳はボロボロだ。

しかし、文句を一言でも言えば、私に頼んだあんたが悪い、と言いつい換えされることだろう。

トコトコと軽い足音が響いてきて、ひょっこりと小さな男の子が姿を現す。

「太一」

ゆずるがわずかに顔を緩ませて、少年を手招いた。その後ろから数久もやってくる。

「ゆずる姉様」

「無事だったか」

「でも、お祖母様が……」

言葉を詰まらせた太一に代わり、数久が深刻そうな顔で口を開く。

「どこにも姿が見当たらないんだ。気配もない。たぶん……」

「……そうか」

妖怪に連れ攫われたか。喰われたか。霊に躰を乗っ取られた可能性も考えられたが、いや、それなら姿が消えることはない。霊ではない。たぶん妖怪の仕業だ。

妖怪を父に持ち、その血を濃く継いでいた祖母だった。

数久がふと目線を移動させ、夢月を見つける。にこっ、と微笑んだ。

「ケガはない？」

「ないよ。数くんは？」

「んー。ない……と思う」

「あるんだね。治してあげようか？」

「あとで雲居にやってもらおうよ」

「そっか！」

夢月は嬉しそうに歯を見せて笑った。雲居とは数久の式神で、白蛇の妖怪だ。

「お母さんによろしく。 ああ、そっか！あとね！」

夢月は手を打って、大声を上げる。何事かと、数久が眉を寄せると、言いにくそうに口元を歪めた。

「あのね、私たち、卵で生まれたから」

「え？」

「卵で生まれてくるけど、びっくりしないでね」

「ええっ」

聞こえてしまった直久も思わず口をあんどりさせる。

普通、それは驚くだろ！

さすがの数久も驚いて言葉がないらしく、無言で夢月を見つめている。

「数くん、お母さんが卵を産んだ時、しばらくシヨックで口が利けなくなったらしいから、先に話しておくね。あんまりびっくりしたら、卵を産んだお母さんもシヨックだから」

「うーん。そうだね。今から覚悟しておくよ」

「お願いね」

長年の憂いが晴れたという顔で夢月はニッコリ笑い、数久に爆弾を一つ投げ渡した。

何というか、さすが数久の娘というか、笑いながらスゴイことを言い出すところが、数久とそっくりだ。

早季が夢月と夕樹の名を呼んで、それぞれに手を差し出した。いよいよ帰るのだ。

すうつと空気が変わる。色というか、体感温度というか、雰囲気が変わったのだ。

三人の頭上に歪みができる。

歪み。凹凸レンズがそこにあるかのように、見える景色にズレが生じるのだ。

これが時空の穴。実際に目に見えるようなものではない。例えば、壁にあいた穴のようにハッキリとしたものではないのだ。

否、似たようなものかもしれない。

『時空』を『壁』に例えるのならば、それは確かに『壁にあいた穴』なのだ。

不意に早季が振り返って、ゆずるを呼んだ。何かと聞き返すと、早季は微笑み、目だけで穴の底を指す。

覗き込んで、ゆずるはハツとする。直久も穴を覗き込んだ。

穴の底。ずっと奥底。未来の自分が、今の自分と同じように驚いてこちらを見上げていた。

懐かしそうに微笑んで、彼はこちらに向かって両手を差し出す。ダンッ。

早季たちは床を強く蹴り、穴の中へと飛び込んだ。早季を受け止める未来の自分。再び見上げて、やはり懐かしげに微笑んだ。

8・なあ、ゆずる

だだだだーっ、と物凄い音が響いてくる。

地震か？ 火事か？ と廊下を見やると、木村史宏がバーンと音を立ててドアを引き開け、教室に飛び込んできた。

「直久、大変だ！」

「んあ？」

「3組の樋口だ。今、九堂を連れて二階の空き教室に……」

「何だつて！」

最後まで聞いていられない！ 直久は教室を飛び出して、一目散に廊下を駆けた。

中学の時は良かった。ゆずるはずっと男装をしていたから、急に女に戻ったからといって、すぐにゆずるを女として扱う男などいなかったからだ。

だが、高校に入学してからというもの……。

ああんな可愛いスカートひらひらさせて、髪もふわふわ猫毛だし、肌は白いし、目は大きいし。

どっからどう見ても女の子のゆずるを、中学時代の男装姿を知らない男子は、ほっとかないと言うか、ほっとけないのだ。

直久の味方は、中学生時代からの友人である木村と双子の弟くらいで、あとの男と言ったら、上級生から下級生まで、ゆずるを狙う不届き者ばかりである。

「直、どこに行くんだ？」

こんな時なのに、バツタリ廊下で出会ってしまふ尊敬すべき先輩。直久は足にブレーキを掛けて止まった。

「もうすぐ部活の時間だろ？」

「キャプテンが遅れたら、示しが付かないんじゃないの？」

深沢高明の隣にいたのは、彼の幼馴染みの池部怜司だ。直久は焦

れったそうに足踏みを開始する。

「今、それどころじゃないんですよー」

「なんだ、また、愛しのゆずる君を他の男に連れ攫われちゃったわけ？　大変だね」

「ぜったい面白がつてるでしょ、いけべー先輩！」

「面白いじゃん！」

「怜司……」

「そんなに不安なら、さっさと結婚しとけば？」

「言われなくとも18になったら、即行で籍を入れます！　って

いうか、今でも一応、婚約しているんですけどっ」

「それ、もっと公表した方がいいよ。ちっともゆずる君に群れる男が減らないじゃん」

「しているんですけどね。かなり！何度もたくさん！」

直ちゃん、と呼ぶ声が聞こえて、直久は振り返る。

「どうした、数？」

「大変だよ、ゆずるが……3組の樋口くん……」

息を切らせている数久の説明は要領を得ない。直久は数久のことを高明たちに任せて、再び駆け出した。

木村から聞いた空き教室の前まで来ると、勢いよくそのドアを開いた。

「ゆずるー！」

目に飛び込んできた光景に呆然とする。人が倒れている。

「直」

「ゆずる、無事か？」

「私は無事だけど、思わず、そいつの急所を蹴り飛ばしちゃった」

「……あ」

うつ伏せに倒れている少年が、たぶん、きっと、樋口という奴なのだろう。見覚えのない顔だ。

「よくやった、と言いたいところだけど、ずいぶん長いこと男やっていたとは思えないぞ、それ。急所はダメだろう……」

「……」

「ま、いいつか」

ゆずるが無事なら、万事OKである。

部活に参加する気力をすっかり失い、直久は教室に部活鞆を放り捨てると、ゆずると共に帰路につくことにした。

校門を抜けた辺りで後ろから駆けてくる足音が聞こえ、振り返ると、数久だった。

「ねえ。ちよっと、うちに寄らない？」

「ん？」

「もうすぐ卵がかえるかもって」

「もう生まれるのか？」

「生まれるというか、孵化するかもって」

いったいいつの間になんかそういうことになったのか、雲居は一月前に3つの卵を産み落とした。

抱える程の大きさで、満月のようにまんまるの卵だ。どんな姿で卵から出てくるのか、かなり怖いのが、興味はある。

蛇にしか見えないような姿だったら、どうしよう。

だが、二年程前に見た少女の姿を思い出して、不安を振り払う。

夢月は可愛らしい少女だった。早季と同じくらいに。

「姉さんも今日、家に帰ってくるってさ」

「何だよ、夫婦喧嘩か？ 腹に子どもいるくせに？」

「だからだよ。妊婦は普通、臨月が近くなったら実家の方に戻ってくるものらしいよ。ちなみに、喧嘩はしていないからね」

「貴樹さん、我慢しているよなあ」

そうだね、という賛同は得られなかった。あれでいて、貴樹もなかなかの曲者だからだ。

久し振りに生まれ育った我が家に帰ってきた直久は、和室の縁側に置かれた巨大な卵にギョッとする。

聞いた話と、実際に見るとでは、大きな差があることを思い知る。

実際に目を見ると、大きな過ぎる卵は異様だった。

「あれ？ 二つしかないじゃん」

「うん。一つは閉まってあるんだ。直ちゃんたちの娘が生まれ
た時に孵化させようと思って」

「腐らないか、それ……」

二つの卵の側に膝を折り、数久を見上げるようにして、ゆずるは
呆れ声を出す。数久は小首を傾げた。

「雲居は大丈夫だって言ってたよ？」

「閉まって？ どこに閉まってあるんだ？」

「えーっと、冷蔵庫」

「冷蔵庫!？」

間違っても、ニワトリの卵と勘違いして料理に使うことはないサ
イズの卵だが、いくら何でも冷蔵庫は……。

二度とこの家の冷蔵庫は開けたくないと思いながら、台所の方向
をチラリと見やる。

そこに鈴加がやって来た。

「あら、珍しい顔を見たわ」

「お邪魔しています」

「ゆっくりしていつてね、ゆずる君」

大きい腹を邪魔そうにしながら、歩み寄ってくると、卵を見下ろ
して、その側に座り込んだ。

「今夜にも孵化しそう？」

「そう、雲居は言っているけど……」

「全身、緑色の肌をしていたりして」

「姉さん」

「ウソよ、嘘。じょーだん」

「正直に言つと、僕も不安なんですから、これ以上不安にさせるよ
うなことを言わないでよ」

「あら、そうだったの？ ごめんね。私も不安だったから」

鈴加にしては気弱なこと言う。直久は怪訝な顔で姉を見やった。

気付いて、鈴加は気まずそうに微笑んだ。

「ほら、うちの一族って、死産率高いじゃない？ 生まれても、人の世では生きられない場合もあるでしょ？」

ゆずるの異父妹である優香の双子の兄のことを言っているのだ。

彼は異形な姿で生まれてしまったため、本家の裏山に捨てられたのだ。そして、今は優香の式神として彼女の側にいる。

「とりあえず、ちゃんと生きて生まれてきて欲しい。そして、とりあえず、人として生きられるように生まれてきて欲しいわけ」
「うん」

分かるよ、と数久。

その時。コツン、と軽い音が響いた。ハツとして卵を振り返る。

「今、音」

「うん！」

殻の内側から聞こえた音。もう一度。

「どうしよう、直ちゃん」

「どうしようって、割れやすいようにヒビとか入れた方がいいんじゃない？
やねえ？」

「逆よ！下手に弄らない方がいいって。確か、鳥の本で読んだことがあるわよ」

「鳥と一緒にすんなよ」

慌てる姉弟を余所に、一人冷静にゆずるは卵に手をかざした。

「出てきたいのか？」

コツン、と返事。

「そうか。なら、出ておいで」

パシン、と殻が割れる。そして、もう一つも。

見上げると、暗幕に小さな無数の穴があいているかのような夜空。

月はない。隣にはゆずるがいて、何となく手を繋いで家へと歩いている。

不意に、直久が言葉を零す。

「また、振ってこないかなあ」

「何が？」

「早季」

「……はあ？」

「俺も子ども欲しくなった」

「数に影響された？」

「鈴加も直しきに生むしなあ。

名前、良樹しきっていうんだって」

「鈴加さんの子ども？」

「そう。夕樹じゃなくて、『よしき』だってさ」

怪訝そうな顔をしている直久に、ゆずるは、ああ、と納得して言った。

「夕樹は早季の一学年上なんだろう？ まだ生まれてくる時期じゃない。良樹は夕樹の兄になる子どもだ」

「そっか」

じゃあ、夕樹が生まれたら、次の年に早季が生まれるのか。

でも、その前に、18歳になったら籍を入れて、高校を卒業してからだな。

神社を継ぐには、その上の学校に通って資格を取らないとならぬいから、当分は学生の身だけど、早く早く、早季に会いたい。

「けどさ、サルみたいだったな」

「笑うなよ、直」

「だって、しわしわ！ 皮あまつてたし！」

思い出して笑うと、つられたようにゆずるも笑い出した。

だけど、サルのような赤ん坊の姿を思い出して笑っているのではない。数久の心配事が杞憂で終わったからだ。卵から出てきたのは、ごく普通の人間の赤ん坊だった。

例えその子たちが将来蛇の姿に変身するとしても、とりあえず、

生まれ出てきた姿は人間の姿をしていたのだ。

「笑ったら腹へったなあ」

「きつと今頃、久美子さんが用意してくれているだろう」
家政婦の名前だ。

「なあ、ゆずる」

「ん？」

「ちょっとはお前が料理してくれたりしないの？」

「しない。できない。試してみる気もない」

「……あ、そうですか」

いかにもゆずるらしくて、むしろ笑みが浮かんでしまう。

必死で耐えたが、躰の震えが手を伝わってしまったらしい。ゆずるがムツとしたように直久を見る。

宥めるように握る手の力を強めた。

【完】

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6813d/>

風花

2009年3月24日11時20分発行